
「チートを乗り越えた先には何があるのか」の番外編

XX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「チートを通り越した先には何があるのか」の番外編

【Nコード】

N2473V

【作者名】

xx

【あらすじ】

他の作者とのクロスオーバー、もとい他作者様制作の小説の二次創作

本家作者には許可取ってから作っています

「最強の路を往く」番外編っぽいの（前書き）

時系列的にはツクハ登場少しあと

「最強の路を往く」番外編っぽいの

「『狭間』」

狭間サイド

「ほう・・・」

俺の存在を知ってか知らずか勝手に世界を作る輩が現れるとは

「こんな奴は久しぶりだな、暇つぶしに行ってみるか、どんな世界を作ってるのかも楽しみだし」

遠見で見ればいいんだろうがそれでは楽しみが一つ消えるではないか
どんな世界を作っているのかは知らないが楽しみにしておくか

「????（エリスには解らない）」

エリスサイド

「急がないと・・・あの子が!」

早くこの世界を作らないと!

- - - それでも時間稼ぎにしかないんだろうけどね・・・

「『あの子』がどうしたって?」

!?

今まで気付かなかった、余程焦ってたのかはわからないけど気配の
探知を怠った

いや、こんなところに人なんている訳がないと考えていたわよね・・・

・不覚

「所で世界を作ろうとしているよね？」

「そうね」

「一応神しか世界を作ってはいけない事になっている事は知ってるよね？」

「そうだったわね」

「もしそれを破った場合には誰が取り締まるのか知ってるか？」

「誰だろうが知ったこっちゃ・・・」

「私だよ」

その瞬間に吹き出す

魔力、霊力（推定）、妖力（推定）、瘴気、神力、それらの高位に位置すると思われる力

ハッキリ言って私のそれでは目の前にいる『取締役』には到底及ばない

舐めてかかるわけにはいかないわね・・・

―― 顕現 ――― 《パリン！》

「っ！これは・・・」

『驚いた？だけど今は時間がない』

そして私は光の濁流を放つ

【相手の防御なんて無意味】なそれを

「防御が無理なら躲せばいい」

いつのまにか『取締役』は剣を持って斜め後ろにいたとっさに私は盾を創った

【その一振りでは絶対に斬ることができない】盾を

《《《キ！！！！キイン！！！！》》》

鼓膜が破れるかと思うような大音量の後、盾は無惨にも真つ一二つ

「くっ！」

私は耳を押さえて飛び退く

顕現 が 顕現 以外に破られる訳ないのに

（確かめる必要がありそうね）

「思考は済んだかい？」

また同じ状況

私もまた盾を作り出し今度はこうイメージする

【この攻撃が見える】と

答えは以外にも簡単だった

一撃で斬れないなら切れるまで叩き込めばいい

顕現 のおかげで攻撃が見えるようになった私にははっきり見えた一撃ごとにほんのわずかにへこむ盾と

何十回何百回と数えるのもおこがましいほどの剣を叩き込む『取締役』の姿が

（ 顕現 の穴はこんなところにもあったのね）

顕現 の強さはイメージと自分を信じる強さによって決まる要は「イメージをしていなければそれは実現されない」のだ

顕現 の穴、それは「不意打ちに物凄く弱い」のである

ならば対策をとるのは簡単

（いえ、対策を取るまでもないわ）

こちらも剣を取り出す

【相手は攻撃された瞬間も分からぬまま意識を刈り取られる】

結果、あっさり終わった

殺すのではなく意識を刈り取ったのは

殺すのは何か嫌な予感がしたからである

「早くあの子を閉じ込めておく世界を作らないと・・・」

私は世界を作る作業に戻った

（最後に神にバレないように隠しておかないとね）

「『狭間』」

狭間サイド

「いたたた・・・」

私は意識を取り戻した

タイミングの良いことにあの少女が世界を作り終えた瞬間だったようだ

スタスタスタ・・・

「ちよつと待て、」

「何？」

「せっかくだからお前に世界を創る神としての許可をやるっ」

「そう、なら今度から面倒な戦闘をせずに済む訳ね、でも貴方が許可を出してもいいの？『取締役』さん？」

「それなら大丈夫だ、私は『取締役』兼『管理者』兼『責任者』兼『所有者』だから」

「ややこしいわね、私はもう行ってもいいのかしら？」

「OKだ、では達者で」

「さよなら」

そしてその少女は消えた

「そう言えば自己紹介もしてなかったな、まあ今度会った時でいいか」

そして少女が創った世界の運命を見て

「ふふふ・・・これはすごいな」

その目には死屍累々に悪魔や天使が倒れてる中

六人の少女がイチヤイチヤしている世界が映っていた

「面白そうな奴じゃないか、あいつに許可出して良かったよ」

狭間は一人笑うのであった・・・が、後に笑えなくなる

「どの位時が過ぎたのか解らないが、『狭間』」
狭間サイド

《パリン！》

・・・

「時間的には数日後」

《パリン！》 《パリン！》

・・・

「さらに数週間後」

《パリン！》 《パリン！》 《パリン！》

「はぁ・・・」

なんということだ、 顕現 とか言ったっけ？

あの少女（エリスという名前だった）

が創った『学園世界』とか言う世界が出来てから少し後からという
もの

しよっちゅう『限界突破』が鳴り響く、恐らく 顕現 だろう

「いったいあそこで何が起きてるんだよ・・・ ちよつと笑っ
てもいられなくなっただな」

「最強の路を往く」番外編っぽいの（後書き）

作者「狭間が世界を作る許可を出した奴」世界を創った神です」

狭間「本人には非通知である事の方が圧倒的に多いがなかなか本人に通知したのは今回が初めてだ」

作者「ところであの《パリン！》ってのは？」

狭間「あれは『限界突破』だ簡単に言うと誰かの「力」ちから

が私を超えると私の中で起きる音であり文字通り次元をひとつ超えた強さになる

《パリン！》は突破した時の通知音みたいなもので別に無くてもいい」

ある日の出来事（前書き）

時系列的にはミストとノルウが旅を始めて間もないころです
ノルウは弱々しかっただんです
本当に

ある日の出来事

「森：危険度D」

ノルウサイド

「ふふふふふ」

私は鼻歌を歌いながら食べられる草や茸を採っていた
・・・残念ながら周囲への注意を怠って

ガサガサ・・・ビュツ 「え?・・・キヤア!」

ミストサイド

「キヤア!」遠くからノルウの悲鳴

「!?ノルウ!」

ここは危険度Dだが不意打ちされれば怪我はする
私は急いでノルウの助けに入った

ノルウサイド

「あわわ・・・」

腰が抜けてしまっている

私を押し倒して上に乗っているシルバーウルフは強いモンスターではないでも吃驚して腰が抜けてしまっている

「そこ！」 キャン！

ミストの魔力が入った飛び蹴りでシルバーウルフが一匹絶命した

「ミスト！・・・助かったあ・・・」

「いんや、まだだよ」「え？」

私達の周りを10匹以上のシルバーウルフが囲っていた

「あ・・・」

「はあ、今度から『イタズラ式危機管理能力トレーニング』が必要かもね」

「なにその安心するような怖いようなトレーニングは」

ヴウウウウ・・・

シルバーウルフがこちらを威嚇してきている

「ミスト、どうするの・・・」
と言ってミストを見ると

「貴様ら・・・」

目を瞑っているけど明らかに怒っている事がわかる

ミストサイド

目を瞑り

「貴様ら・・・」

と言ったあと

そこから片目を開き

「ノルウを襲つといて生きて帰れると思うなよ?」

一度はやってみたかった厨二な動作とセリフ

気に入ったから今度からもやろう

そこからはただの虐殺

魔力で剣を作り

斬る・刺す・斬る・斬る・刺す・刺す・斬る・斬る・斬る

飛びかかってきたシルバーウルフを

同じく魔力でワイヤーを作り

首を撥ね飛ばす

飛ばす・飛ばす・飛ばす飛ばす・・・

勿論血飛沫が飛びまくる

これはノルウに耐性を付けるためでもある

そして虐殺が終わったあとは

「ミスト・・・なにもここまですることはなかったんじゃないの?」

「ここで殺さないと何度も襲ってくるでしょ」

「それでも!」

「それに『人を襲っても殺されない』なんて学習されてみなさいな
あいつらが人を捕食するようになるよ?」

「うつ・・・」

「こういう生きる死ぬって時にそんな甘いこと言ったら死ぬよ?
あなたが死ななくても関係ない人が死ぬよ?」

「・・・でも」

「『でも生きる為ならここまでする必要もなかった』
って言いたいんでしょ」

「うん」

「シルバーウルフって以外に美味しんだよ?」

「わかったよ、もう何も言えないや
・・・臭いが凄くてもう」

「ははは・・・」

一つ発見

ノルウは以外とグロに強かった

ある日の出来事（後書き）

ノルウは森に倒れるまでは人を殺すのも嫌だと逃げ回っていました
普通の女の子と何も変わりがありませんでした（魔力と属性以外は）

第一話：始まりの救助　そして師匠

「前振り」

霧先サイド

俺の名は「霧先　涼」多分、変哲だらけの高校生だ

俺の周りでは何故か事故が多い俺は孤児なのだが
バイトと、その救助の礼金だけで生活が出来るくらいに多い

そしてそんな事故の一つ
だが今回は違った

事故自体は何も変わらないのだが助けた人が違った

これはそんな「あいつ」を助けた所から始まるお話だ
それが今、始まる

ストーリー

「地下鉄」

霧先サイド

「てめえはいつもそうなんだ
だからムカつくんだよ!」

（これは虐めか？ 周りからは人が離れているな）

俺は反対側の車線からいじめの現場に偶然気がついた

「わっ！ ドサッ うう・・・」

「ちょ！これどうするよ」

「やべ、逃げる？」

「おい！人が落ちたぞ」

「誰か助けるよ」

「俺しーらね」

「そろそろ電車がくるぞ・・・」

「見られてるから無理っしょ」

（線路に落ちた落下の衝撃で悶絶つと、このパターンだと・・・ここか

中学生位か？やることは変わらないけどね）

俺は駆け出す、反対側の車線から

そして中学生位の女の子の所にたどり着き抱え上げた

「誰かこの子を引っ張り上げてください！」

俺は叫んだ

ここまでやれば引つ張り上げる奴は居る

「ああわかった、今引つ張るぞ！」
30代くらいの男性が手を伸ばす

この人が行動を起こす前に俺が動いたっぽいな
顔を覚えておこう、後で礼金の1/5位分ける為だ
当然だろう？手伝ってもらったんだから

「「せーのっ！！」」

「よし、引つ張り上げたぞ！ 大丈夫か？」

「あ、はい有難うございます！」

このまま行けばハッピーエンドだ

だがしかし

「電車が来たぞ！」

（あーあ来ちまったか、フラグは立ってたんだよね）
なんでこんなに落ち着いているのかって？
それはな・・・・・・・・

キキ————!!!!!!

||||||||||||||||

少女サイド

「・・・・・・・・」「・・・・・・・・」「」

私とおじさん、そして私をいじめていた女子三人は立ち尽くしている

「貴方達が・・・・・・・・」

貴方達があんな事をしなければこんな事には成らなかった!」

もう我慢ならない、私は叫ぶ

ほかの人が巻き込まれてしまったのだ

「・・・・・・・・」「・・・・・・・・よく言った」

おじさんは褒めてくれたけどそんなもんじゃない

これは自分へ向けた言葉でもある

(私が少しでも抵抗していれば

こんなことにはならなかったのに・・・・・・・・」

私達が啞然としている間に電車は出発し
いつの間にやら警察が来ていた

「さあ来てもらおうか」

「・・・はい」

「離せ！離して！離して！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一人は大人しくついて行き

一人は抵抗する

そして一人はそれどころじゃないのか放心してしまっている

そして、そんな物々しい雰囲気をつたった一言の言葉がぶち壊した
そう、たった一言の、一人の呟きが

「ああゝ死ぬかと思った」

「無事だったのか!？」

「ええ、電車の線路の下には電車の重みで減り込まないように砂利が引かれてあるんです」

ここで俺は線路を指さす

「『だいたい人が寝転がった位の高さまで』ね
そこで俺は寝転がって無事だったというわけですよ」

ここで駅員の人々が驚く

「じゃあこの3人は・・・」

「連れていかなくていいんじゃないですか？
結局こうして全員無事だったわけですし」

そしてさっき線路に突き落とされた女の子が抱きついてくる

「うわーん!!!」

良かったよう・・・貴方が無事で本当に・・・」

そして俺はこの子に小声でこう話す

「（君は偉いよ、あの三人を攻めながらも
『自分が抵抗していれば良かったかもしれない』と言っていたじゃないか）」

「へ?」

「（君は良い大人になれるよ、俺が保証する）」

「（お名前を教えてください）」

助けた人の名前くらいは知りたいか

「（霧先 涼だ、もう会わないと思うがな
もし今度会ったら弟子にでもとってやる）」

「（秋風^{あきかぜ} 散葉^{ちるは}です、また会いますよ）」

ん？なんか違和感が・・・

「ハッ！ 私人を殺・・・えっ、なんでこの人生きて」

「『『『『『その話はもう終わっている』『』『』『』』」

だがこの後、激しく後悔した

弟子に取るなんて軽々しく言うもんじゃないと・・・

|| || || || || || || || || || || || || || ||

「居候きさくしている黄咲家：玄関前」
霧先サイド

「約束しましたよね！ 師匠？」

こいつ・・・！

第二話：誰も出来ないことをしたい

「当たり前」を忘れない（前書き）

作者の信条です

小説を書き始めてから改めて気付きました

第二話：誰も出来ないことをしたい

「当たり前」を忘れない

「放課後の後区内」

霧先サイド

俺達は後区内のゴミ拾いをしていた
ボランティアといえばそうなんだろうけど
そういう活動の服を着ているわけでは無く

「
♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~
」

「ところで師匠？なんで後区内のゴミ拾いなんてしているんですか？」

26

もちろん散葉も一緒にやっている

やること自体に疑問は無い様だが何故やるのかに疑問があるみたいだ

「俺がここに来た当時からゴミが落ちていない『当たり前』があつてね

そしてゴミを拾っている爺さんがいたんだ

結局その人は来なくなつてね、多分病気が寿命か

——そして『当たり前』が一つ、無くなつた——

それに『やらない』というのは『できない』というのとほぼ同じなんだ

つまり『だれもゴミ拾いをしない』というのは

『誰もゴミ拾い出来ない』というのとほぼ同じ、ということになる
元々はそんな意地で始めたんだけどいつの間にか習慣になっちゃっ
てね」

「面白い意地ですねー、でもそういう意地なら良さそうです
そう考えるとなんだかゴミ拾いも楽しくなってます!」

そうだろう?

そして『ゴミ拾いが出来ない人』を腹の中で笑うのさ・・・
「そして腹の中は黒いのであった・・・」

中二病である

「黄咲家：夕食」
霧先サイド

「「「いただきます」」」

モグモグ

「霧先君は『いただきます』を忘れないね」
おじさんが聞いてくる

忘れる訳がない

「俺は『当たり前』が何で当たり前か考えないことが大嫌いなんです
今ここで食べられる『当たり前』は
お仕事でお金を稼いでくれているおじさん
それを調理してくれるおばさん
一緒にわいわい食べる黄咲家の皆さん
全員がここにいるから美味しく食べられるんです
食べられる『当たり前』の全てに感謝するのが『いただきます』
だから絶対にいただきますを絶対に忘れないんです」
そう言いながらも食べを進める俺

「相変わらず霧先君は考えているわねえ・・・でも『おばさん』h」
「ごちそうさまです」
「あ、ちよと待つ」では洗濯物をたたむ系の仕事があるのでここで
・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2473v/>

「チートを乗り越えた先には何があるのか」の番外編

2011年11月13日10時54分発行